

第10部会

に檀那寺の僧侶は日々の生活の中でも不断の感情管理を続けることが陰に陽に期待され、仮にその期待から逸脱した感情表現をおこなったと見なされた場合には何らかのかたちでサンクシヨンを受けることにもなる。これらの動きの一方で、多様化する檀家層に対し、檀那寺の側から「あるべき家族像」の提示を意識的にめざそうという例も散見され、とくに親近感や「癒し」、そして一家の歴史をノスタルジックに語るといった感情的な側面において「家族以上に家族らしい」関係性を目指そうとしている動きも伺える。これは既成仏教寺院および僧侶たちに対する家(族)イデオロギー再生産装置としての役割認識に基づいた、一種のイメージ戦略とも言い得るだろう。

人々のライフスタイルの多様化を背景として、檀家となつていく人々の層も従来と比べると多様化が進んだ。したがって、それぞれが異なつた役割期待を寺院や僧侶に対して抱いている蓋然性は高い。さらに檀家の側において「望ましい葬儀・墓のあり方」「望ましい寺院／僧侶」に関する多くの情報を容易に得ることができるようになった。その結果、寺院の方針や僧侶の行動、僧侶と在俗の人々との関係性における「より望ましいあり方」の比較準拠となす対象は増加したまた多様化する。このために僧侶に対する期待の水準が全般的に高くなっている、言い換えれば檀家たちは自身の檀那寺やその寺院の住職のありように関して「ハイレベルな比較対象を多数認識しているが故に、自らの檀那寺の不足点がより目につく」といったいわば相対的剝奪の状態になっているということが考えられる。このことが、既成仏教の問題点として既成仏教寺院の「葬式仏教」的

側面が繰り返し論じられるようになる一因といえよう。一方で寺院側の活動においては、多様化する檀家層に対し、檀那寺の僧侶として向き合う際にはより高度でかつ不断の感情労働、およびイデオロギー装置としての意識的な活動が必要になってきていることが伺える。これによって従前では念頭に置かれることの無かつたタイプの既成仏教寺院およびその檀家との関係性が広がってゆく可能性がある一方で、複雑化する感情管理の結果、僧侶や寺族たちにおける感情の疎外、そして教理からの疎外という現象も起こりえる。今後は現代のわが国において寺院運営にあたるに至つた僧侶たちがいかにしてこの二つの疎外状況の危機に対処してゆくかということに目を向けてゆく必要があるだろう。

パンニャーサジャータカ研究の意義

茨田 通 俊

『パンニャーサジャータカ』(Paṇḍasa-jātaka 五十ジャータカ)とは、東南アジア地域に独自に流布したジャータカ群である。これは、いわゆる聖典ジャータカとは異なる偽経ジャータカである。一般に五十話にまとめられた同名のジャータカ集成が、東南アジア各地に存在するのであり、決して特定の本生話集成を意味するものではない。

その多くは、パーリ語等で書かれた貝葉写本として残存して

いる。タイ・カンボジア、ビルマ、ラオスの三系統に大別されるが、伝承地域によって構成や内容はかなり異なっている。このうちビルマ伝承のものは、P. S. Jaini 博士によって PTS より校訂出版されている。タイ・カンボジア系統のものは、完全な刊本が未出版であり、タイの現地関係者の協力を得て、現在国内において諸写本の校合作業が進行中である。

ところでタイ伝承資料の解読作業の上で、東南アジア特有のパーリ語表記の問題が浮上した。それは子音の重複の脱落 (puṇṇa を puṇa と表記)、長母音に代わる子音の重複 (bhummi を bhummi と表記)、長母音と短母音の交代 (atṭa を attā と表記)、反舌音と歯音の交代 (paṭima を patima と表記) 等 (畝部俊也名古屋大准教授らの整理による) である。さらに偈頌における韻律の乱れも目立つ。これらについては、将来東南アジア方面で使用するパーリ語が言語学的評価の対象と成り得ることに配慮して、その特質を可能な限り反映させつつ校訂本を作成する、という方向で検討している。

また『パンニャーサジャータカ』の物語には、他にはない様々な特徴が見られる。まず王族を主人公とする物語が非常に多い点を挙げたい。東南アジアの上座部仏教伝播の背景として、王権の確立のために権威の象徴として仏教を受容したという点を見逃せない。ジャータカは仏教伝道の有効な媒体であったことは想像に難くない。十五〜十七世紀とされる『パンニャーサジャータカ』成立時には、仏教は東南アジア地域に浸透していたであろう。しかし、源泉となる物語の成立過程には、当地の歴史的政治的事情が反映されたために、王族を主人公とする

物語が多くなったと考えられるのではないだろうか。

Samuddagghosa-jātaka 等複数の物語に見られる、受難の原因は過去世の業報によるというモチーフは、東南アジア独特のものとなる。むしろ聖典ジャータカ等の記述が引用されるケースもあり、インド起源の要素も多分に含まれている。また、仲人を表す雌亀が描かれる (*Sutadhamu-jātaka*) 等、東南アジア固有の習俗の影響も見られる。さらには、ヒンドゥー教の神の名前を思わせる表記が見られるなど、ヒンドゥー文化の影響も否定できない。逆に『パンニャーサジャータカ』がタイ文学に与えた影響も大きいとされている。このように『パンニャーサジャータカ』は、種々の要素が取り込まれて、さながらモザイクのような様相を呈しているのである。したがって、あらゆる角度からの研究が可能であり、学際的な取り組みへの展開が期待できる。一方多様化した文献であるだけに、従来の常識的な方法論を超えて、柔軟な姿勢で取り組むことが必要になって来るだろう。

しかし何よりも強調したい『パンニャーサジャータカ』研究の意義は、仏教学としての東南アジア研究の道が開かれたことである。これまで日本においては、東南アジアは文化人類学の研究対象であり、文献学を中心とする仏教学研究の対象とは成り得ていなかった。その意味で、タイ伝承資料とビルマ伝承本の比較研究を初めとする思想研究等に大いに期待がもてる。また近年盛んになっている写本研究の中でも、欠損が少なく保存状態が良い写本を対象としたものとして、非常に価値の高い研究であると言える。